中国の識別された達斡爾民族(minzu)における民族(minzu)文化の創出及び伝統化

白　　薩日娜

１．はじめに
２．ダフール人／達斡爾民族(minzu)人について
３．政府による達斡爾民族(minzu)の創造
４．達斡爾民族(minzu)文化の創出
５．達斡爾民族(minzu)文化の伝統化
６．終わりに
付録

１．はじめに

周知のように、中国には56の民族(minzu)、55の少数民族(minzu)が居住している。これらの民族(minzu)について、中国の学者は「中国は歴史的に多民族国家である」（黄・施2005：59）と強調しているが、実際は1950年代に行った民族(minzu)識別を通じて形成されたのである。民族(minzu)識別とは、「ある地域に居住している人々の共同体の言語、経済生活、文化と心理的資質及び歴史的来歴についての総合的考察と分析・研究を通じて族体[1]の民族(minzu)成分[2]と民族(minzu)呼称を確定する」（黄・施2005：76）ことであるが、結局のところ、少数民族(minzu)を識別することであった。本論文において扱う達斡爾民族(minzu)はこのようにして識別された民族(minzu)である。

民族とは、今もなお統一的な概念がなく、毛里和子のことばを借りれば、「民族（ネイション、ナーツィア）ほど定義しにくい言葉はない」（毛里1998：66）。綾部恒雄によれば、少数民族という言葉が初めて用いられたのは、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてのヨーロッパにおいてであり、フランス革命による国民国家の出現とナショナリズムの昂揚の所産として表れている。近代ヨーロッパの政治的境界の変化の結果、国家権力を握った強大な民族に従属する地位へと追いやられた少数民族集団をさすのに用いたのである。少数民族を「マイノリティ」という言葉で、社会科学の分析概念として初めて用いたルイス・

1　民族(minzu)グループのこと。
2　民族(minzu)の出自のこと。

ワースは、この言葉を次のように定義している。形式的ないしは文化的特徴の故に、彼らの属している社会の中で他の集団から区別され、異なった不平等な状況下に生活しているため、自らを集団的差別の対象とされていると見なしている人びとである（綾部 2007：4-5）。

以上のように民族あるいは少数民族の概念について検討しているが、筆者も毛里と同じ観点で民族の概念は定義しにくいと考えている。筆者は民族と言う概念を定義する際には、時期や国によって違いがあると考えている。ルイス・ワースは、少数民族を、先に述べたように、形式的ないしは文化的特徴の故に、彼らの属している社会の中で他の集団から区別され、異なった不平等な状況のもとで生活しているため、自らを集団的差別の対象とされていると見なしている人びとであると言うように定義している。筆者はルイスの定義が正しいあるいは正しくないというような単純な評価を下したいわけではない。むしろ、中国の民族概念を定義する場合は、上で指摘した文化の特徴や生活状況を考慮に入れる必要があるのではないか、また、別の基準があるのではないだろうか。

シンジルトは、中国において「民族」という和製漢語が中国に移入された可能性が高く、最初に使われたのは 1895 年であったとする。そして、中国語でいう「民族」（minzu）には三つの意味が含まれるとする。その一つ目は、国家の構成員である国民を表わす時の「国民」（nation）と「市民」（citizen）つまり中国国籍者を指す。二つ目は、国家の認定を受けた公定の民族、つまり十数億人の人口をもつ漢族とそれに比べて絶対的人口の少ない 55 の少数民族、計 56 の民族を指す。三つ目は、漢民族以外の 55 の少数民族のみを指す（シンジルト 2003：38）と言うように述べている。筆者も、シンジルトと同様、中国において民族の意味するところは多様であると考える。使用する言葉によってそれぞれの意味があると考えている。中華民族、民族、少数民族といういくつかの言い方がある。中華民族というのはシンジルトの言及した「国民」（nation）と「市民」（citizen）を指している。民族と言うのは国家の公定の 56 民族を指している。少数民族というのは漢民族以外の 55 個民族を指していると筆者は考えている。

本論文では、筆者は中国の民族を、方法仮説的に nation や ethnos、それを意味する日本語の「みんぞく」とは区別するため、現在の中国における「民族」の意味の多様性に鑑みて、中国語の発音 minzu を利用して「民族（minzu）」のようにルビを振って記したい。本論文における民族（minzu）とは、中国の民族（minzu）識別をきっかけとして獲得した民族（minzu）名称と民族（minzu）自治地域、この二つに相応して想像され創造され伝統化された民族（minzu）文化、さらに民族（minzu）名称と民族（minzu）文化によって形成されている民族（minzu）としてのアイデンティティを持っていると想像する人々が創造した共同体を指している。

さて、中国の民族（minzu）形成については、「中国の場合とくに強調しておくべきなのは、民族識別工作を通じて、民族が『上から作られて』きたことである。統治が及ばなかった辺境の原住民を中華人民共和国の『人民』として統合していくために、彼らに帰属意識を植え

付けるために、一九五〇年代初めから精力的に行われた民族調査・識別工作・言語創造工作は、現代的言葉で言えば『上からの国民形成』であり、欠くことのできないプロセスだったのである」（毛里 1998：74）という議論がある。

また、同じ多民族国家であるベトナムの民族に関する研究を行った伊藤正子は、ベトナムは国民を明確に民族ごとに分類してふさわしい名称を決定し、それぞれに適切な政策を施すことで、諸民族の平等が達成でき国民統合につながると考えているのである（伊藤 2008：14）と論じている。このように、国民統合の角度から多民族国家の民族の創造あるいは形成について論じた研究が出ている。

中国において民族(minzu)識別を通じて創造された民族(minzu)を研究するにあたり、毛里のような視点に立つ研究は当然取られるべき研究のあり方ではある。一方、政治や政策からのみ問題を捉えずに、民族集団とその他の要素との相互作用に着目することも重要ではないだろうか。言い換えれば、中国の民族(minzu)創造の問題は、国家による政治的作業あるいは政策という側面からだけでは論じきれないのではないだろうか。なぜならば、国家による政治的作業あるいは政策を実際に受け止めた側の創造された民族(minzu)が現に存在するからであり、この、創造された民族(minzu)と政治･政策あるいは政府との相互作用にも注意を払うべきだと筆者は考える。

近年、「満族」の形成に関する研究を行った劉正愛のように、中国の民族(minzu)形成に関して民族(minzu)の側に注目した研究が現れている。「民族が『上から作られて』きたというのは、ある程度の妥当性を持つかもしれないが、作られる側の主体性を剥奪してしまう危険性も常にあることを忘れてはならない。その主体性を確立させるためには、もう一つの側面を視野に入れなければならない。つまり、それは『作られる』ことへの少数民族側の積極的な呼応の側面であり、国家によって『創出』された『民族』への少数民族側の『想像』の側面である。それらの一方だけを強調せず、二つあるいはそれ以上の力学を視野に入れてはじめて、中国における少数民族の本質を理解することができるのである」（劉正愛 2006：331-332）との観点を示した。

筆者も同様の視点に立ち、少数民族側の役割を軽視できないと考えている。もっとも本論文における達斡爾民族(minzu)は政府の作業によって識別された民族(minzu)である。このような識別された民族(minzu)は、ただ政府の作業によってのみ形成されたものなのか、あるいは、民族(minzu)側もその形成に一定の役割を果してきたのだろうか。本論文では、筆者は中国における民族(minzu)識別を研究の切り口にして、「達斡爾民族(minzu)」の形成は中国政府の支持を得て、識別された側の民族(minzu)幹部や知識人たちの組織と民衆の参加による積極的な活動によって成し遂げられたという観点から、識別された達斡爾民族(minzu)の形成について考察を行う。

2．ダフール人／達斡爾民族(minzu)人について

達斡爾民族(minzu)は識別される前には、達呼爾(ダフール)（dahur）人と呼ばれた。民族(minzu)識別の時の調査

によれば、当時、ダフール人の中ではダフールという呼称は満洲人の建てた清王朝に帰順した後にできた名称だと考えられていた。発音が満洲語の「投降」（達哈熱－ dahar）と似ているので、満洲語の「投降」という意味であると一般的に認識されていたとする説がある（中央民族学院研究部編 1955：２）。

現在、達斡爾民族（minzu）の人口は、2010 年に実施された第六回センサスによれば、131,992 人[3]である。主に中国の内モンゴル、黒龍江、新疆に分布している。内モンゴルのモリダワー達斡爾族自治旗、エヴェンキ族自治旗、黒龍江省のチチハル市ムルス達斡爾族区に集中的に居住している。

生業形態は多様で、居住する地方によって区別があるが、主には農業、狩猟、牧畜、漁業、林業である。内モンゴル自治区フルンボイル盟のハイラル市やエヴェンキ族自治旗では牧畜業を主とし、その他の地方では農業を主としている。

言語はモンゴル語族であるが、固有の文字はない。中国内の少数民族（minzu）、とくに文字をもたない少数民族（minzu）に普遍的に看取される漢語化の傾向は達斡爾民族（minzu）内にも見られる。

民族（minzu）識別以前のダフール人は清朝期から官吏を多く輩出した。また、20 世紀初頭のフルンボイル地方の政治活動において、ダフール人のエリートは中心的な役を果たした。大きな事件と言えば、1936 年 4 月のいわゆる「凌昇[4]事件」で日本の関東軍がダフール人の凌昇を「通蘇通蒙」の罪で殺害したことなどがある。

ダフール人の学者は 19 世紀には自己の特殊性に何らかの注意を払っていたらしく、ダフール人の出自問題に関する著作が著された。華霊阿は『達斡爾索倫源流考』（1833 年）で、唐代室韋部あるいは室韋部中の「達姤部」の後人と論じた。郭克興は『黒龍江郷土録』（1926 年）で、ダフールは遼代契丹の後裔としている（『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1996：338）。また、阿勒坦噶塔『達斡爾蒙古考』（1931 年）と何維忠『達古爾蒙古嫩流志』（1943 年）はモンゴルと同じ族源であると述べた（『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998：６；『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室 1998：143）。

ダフール人の出自はダフール人研究者以外にも多数の学者の関心を集めてきた。たとえば白鳥庫吉は「契丹民族が今日の達瑚爾の祖先にして、蒙古分子の多き通古斯分子の少なき雑種である」（白鳥庫吉 1970：531）と述べ、「達瑚爾」すなわちダフール人は契丹の後

3　国務院人口普办公室国家統計局人口和就業統計司　中国 2010 年人口普査資料 http://www.stats.gov.cn/tjsj/pcsj/rkpc/6rp/indexch.htm　2013 年 1 月 3 日アクセス。

4　1886 ～ 1936。ダフール人。現在の内モンゴル自治旗フルンボイル盟ハイラル市エヴェンキ自治旗の人である。清朝末民国初に筆帖式や佐領を務めた。満洲国時代には、興安北省の省長を務めたが、その行動が反日的であるとして、1936 年に日本の関東軍に逮捕され、1936 年 4 月 20 日満洲国高等軍事法廷は凌昇を「反満通蘇事件」を起こしたとして死刑判決を下し、24 日死刑が執行された。これを凌昇事件と言う。（満都爾図 2007：659-660）。

裔と見なしている。シロコゴロフは「ダフールは疑ひもなく北方ツングース起源の若干の氏族名を含んでゐる。ダフール、少なくともその一部が起源上から見て蒙古族群團ではなく、恐らく蒙古群團に起源を有するハルチンによつて支配されてゐた一ツングース群團であることが推測されよう」(シロコゴロフ 1982：163) と述べている。

現在、中国では、特に 1956 年にダフール人が単一民族(minzu)である達斡爾民族(minzu)と識別された後は、ダフール人研究は達斡爾民族(minzu)研究になった。このことは、後述する民族(minzu)文化の創出から明らかに理解できる。

中国の民族(minzu)識別を通じてダフール人はモンゴル人とは区別されたという観点を持っているユ・ヒョヂョンは、今の達斡爾民族(minzu)はモンゴル民族(minzu)であるかという問題について検討を行う過程で、中国国内における彼らの族源に関する研究の中では「契丹出自説」を裏付けようとするものが、「モンゴル出自説」などほかの諸説より多いことを指摘している。そして、「契丹出自説」を裏付ける試みは、独自の民族としての「識別」への強いこだわりを示すと同時に、「識別」以前には戻れないと考える人々が多いことを示しているという。さらにユは、「識別」にこだわりつつも「識別」や「区域自治」[5]をめぐる過去を振り返ることには抑制的であることにも同様のことがいえるという。その上で、こうした状況は、「識別」そのものの結果や独自民族としてのその後の歩みをそれとして受け入れ、「中華民族」の一員として生きていこうとする方向へ人々の気持ちが向かっていることをあらわすのか、それとも、「識別」以降の記憶がまだ新しく、まだそれを表に出すことが躊躇されていることを意味しているのかについては容易に判断できることではないが、そのどちらにしても、こうした状況は大きな民族に囲まれ、自らの運命を自らの意思や努力だけでは切り開くことができない、小さな民族の悲哀を示しているものである、との見解を示している（ユ 2009：266-267)。ユの研究は、一次資料をふんだんに用い丁寧な分析を加えた優れた研究である。ただ、ユは、ダフール人の運命は政治活動の影響を受けて、自らの運命を自らの意思や努力だけでは切り開くことができないと見ているかのような論を展開している。この点は筆者の観点とは違うのである。ダフール人 / 達斡爾民族(minzu)を取り巻く政治的状況は、確かに自由に身動きが取りづらい状況にあった。しかし、筆者は、識別された側の達斡爾民族(minzu)が自らの識別に果たした役割が明らかになれば、完全な閉塞的状態にあったと言う必要はないと考えている。逆に、ダフール人が達斡爾民族(minzu)と識別されたことは達斡爾側の努力とも緊密的な関係があると考えている。主に、達斡爾民族(minzu)の上層のエリートたちの役割をおろそかにすることができないと考えている。

5　ある少数民族(minzu)が集中して居住する地域において、民族(minzu)の文字・言語を使用する権利、一定の財産を管理する権利、一定規模の警察・民兵部隊を組織する権利、区域内で通用する単行法令を制定する権利などを行使すること。

3．政府による達斡爾民族（minzu）の創造

1956 年 4 月 1 日、中央政府は「達斡爾民族（minzu）」を単一民族（minzu）として正式に認定した（鉄林嘎 1998：41）。これ以降、ダフール人たちは達斡爾民族（minzu）という身分で中国の 56 の民族（minzu）の一員として生きてきた。この過程で、「政府による創造」とも呼びうる、民族（minzu）名称の認定、民族（minzu）地域の認定、民族（minzu）幹部の養成、の三つの重要なことがなされた。

まず、現在の「達斡爾」という民族（minzu）名称は、おおむね以下のような経緯を経て採用された。1950 年代、ダフール人にとって「達斡爾」（dawur）という漢字音訳はダフール語の発音と比較的近く感じられたので、ある地方のダフール人（モリダワー[6]旗とバトハン[7]旗）が民族（minzu）名称を「達斡爾」と翻訳する旨、民族（minzu）識別調査団に意見具申した（中央民族学院研究部 1955：２）。その後、1956 年 4 月になって、国務院がダフール人を単一民族（minzu）と識別した後に、漢字表記を「達斡爾」に統一し、達呼爾（ダフール－筆者補）という表記は用いられなくなった（満都爾図 2007：13）。以上のような経緯を経て、達斡爾民族（minzu）は、「達斡爾」という、中国政府に承認されたという意味での正式な民族（minzu）名称を獲得した。

次に、民族（minzu）地域認定に関して、中国政府は、当該の少数民族（minzu）が集中して居住している場所に民族（minzu）自治地域を成立させることとしていた。これは、中央政府が民族（minzu）を管理するために必要な措置とされていた。1958 年 8 月 15 日、それまでのモリダワー旗（1930 年代に成立し、1949 年にはバヤン[8]旗と合併した[9]）に「モリダワー達斡爾族自治旗」が成立した。これは達斡爾民族（minzu）が自治権を行使する唯一の地方である。

第三点は、民族（minzu）幹部の養成である。実際、「民族幹部の養成と使用は共産党の民族政策を実現させる上で肝心な事柄である」（蘇勇 1997：439）と指摘されるように、1957 年、民族（minzu）工作を主たる任務としていた李維漢は「大量に民族幹部を養成することは、民族工作の本拠である。…（中略）…我が国の社会主義事業の発展に伴って、民族幹部を養成することをさらに重視することが要求されている。政治、経済、文化工作を担任できる幹部を養成する」（羅・徐 2005：197-198）と主張した。国家の民族（minzu）政策を自治旗に深く浸透させ実施して、1958 年にモリダワー達斡爾族自治旗が成立した後には、少数民族（minzu）幹部の養成が本格的に展開され始めた（鉄林嘎 1998:695）。こうして養成された達斡爾民族（minzu）幹部は、民族（minzu）側で国家の民族（minzu）政策の実施を担う役割を果たし、達斡爾民族（minzu）文化の創出を推進してきている。このことについては、次の 4 で詳述する。

つまり、政府による民族（minzu）の創造は民族（minzu）文化の創出の重要な土台になっている。たとえて言えば、民族（minzu）とは、達斡爾民族（minzu）文化を収めるために国家が与えた「器」のようなものである。

6　モリダワーは漢字では「莫力達瓦」と表記する。

7　バトハンは漢字では「布特哈」と書かれる。

8　バヤンは漢字では「巴彦」と表記する。

9　満都爾図 2007：57。

4．達斡爾民族(minzu)文化の創出

上で述べた「器」に収める実体的要素である民族(minzu)文化とは、「達斡爾民族(minzu)の言語」、「達斡爾民族(minzu)の歴史」、「達斡爾民族(minzu)の伝統」、「達斡爾民族(minzu)の料理」、「達斡爾民族(minzu)の体育」、「達斡爾民族(minzu)の服装」という言い方をされる要素である。このような民族(minzu)文化は民族(minzu)の個性を端的かつ明瞭に示し、当該民族(minzu)の存在を主張している。本節では、このような民族(minzu)文化が創出されていることを明らかにする。エリック・ホブズボウムは、「『伝統』とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時に捏造されたりしたものもある」（ホブズボウム 1992：９）と述べ、このような伝統を「創り出された伝統」という語で言い表している。筆者は、この創り出された伝統論に基づいて、「民族(minzu)文化」の創出とその伝統化、つまり「民族(minzu)文化」という「伝統の創出」について考察を進める。まず民族(minzu)文化の創出方法を見よう。

4－1．学者たちの研究

1950 年代、中央政府は、民族(minzu)識別活動に引き続いて、民族(minzu)と識別された人々の社会と歴史に関する調査を実施した。1956 年、全国人民代表大会の常務委員会は当該民族(minzu)出身の学者を含む研究調査団を派遣して、全国で少数民族(minzu)に関する調査を行った。達斡爾民族(minzu)に関する調査は同年 12 月に行われた（孟志東、恩和巴図、呉団英 1987：５）。

また、1958 年には、国務院民族(minzu)事務委員会と中国科学院哲学社会科学部の指導下、中国科学院民族(minzu)研究所、中央民族(minzu)学院と少数民族(minzu)地方の文化機関は、各少数民族(minzu)の簡史、少数民族(minzu)簡志、民族(minzu)自治地方概況からなる一連の書籍を編纂するために、各少数民族(minzu)地方で調査を行った（内蒙古自治区編輯組 1985：［１］）。達斡爾民族(minzu)に関する調査は、1958 年 10 月に内モンゴル少数民族(minzu)社会歴史調査組がモリダワー旗で実施した（鉄林嘎 1998：44-45）。以上の二つの調査の結果、『達斡爾族社会歴史調査』が編纂され、1985 年に出版された。

このように、民族(minzu)識別工作ののち、各少数民族(minzu)の歴史とこの歴史の過程で形成された社会や文化の変遷状況を明らかにするための調査をおこない、書籍を刊行したという事実がある。このように、中国では、各少数民族(minzu)固有の歴史、社会、文化を明確に定義する作業が行われていたのである。こうして達斡爾民族(minzu)も、自らの歴史・社会・文化が具体化、明確化された。

「文化大革命」の影響もあって、1966 年から 1978 年までは民族(minzu)工作が全面的に停滞した。1978 年末の中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議の開催後、民族(minzu)工作の力点の置かれ方が変化し始めた。そして、1982 年の中国共産党第十二回全国代表大会以降、民族(minzu)工作は全面的に復活し発展した（李資源 2000：395）。この時期の民族(minzu)工作の重点は民族(minzu)の経済と文化の建設に置かれた（李資源 2000：411）。民族(minzu)工作の任務と重心が少数民族(minzu)の文化と経済を発展させることへと移動したことに伴って、達斡爾民族(minzu)文化活動は以

前にもまして盛んに行われた。

たとえば民族の歴史の研究では、『十七世紀達斡爾族人民抗俄闘争』（楊旺 1977）、『達斡爾族的卓越愛国者－巴爾達奇』（穆毅 1979）が刊行された。このような達斡爾民族史の確定作業は 2000 年代に入ってからも続いており、『中国達斡爾族史話』（巴図宝音、鄂景海 2005）が刊行されている。これらの書籍には、達斡爾民族が中国の一少数民族であることを強く印象づけるような書名がつけられている。つまり、中国の一少数民族であることを歴史的に証明するための歴史叙述とそのための研究が行われてきたことを意味している。

歴史の研究以外には、達斡爾民族の言語と文学の研究も盛んになった。言語関係では、内モンゴル大学の恩和巴図が 1980 年代に、『達漢小詞典』（恩和巴図 1983）、『達斡爾語詞彙』（恩和巴図 1984）、『達斡爾語話語材料』（恩和巴図 1985）、『達斡爾語和蒙古語』（恩和巴図 1988）を出版している。文学方面では、『達斡爾族民間故事選』（孟志東 1979）、『達斡爾族伝統詩歌選訳』（奥登掛、呼恩楽 1991）、『達斡爾族民間故事選』（孟志東 2007）、『中国達斡爾語韻文体文学作品選集（上・下）』（孟志東 2007）のような選集が 1979 年から最近に至るまで出版され続けている。これらの書籍にまとめられている文学作品のほとんどは、達斡爾民族の人々が語り継いできたとされる“昔話”である。つまり、彼らの代表的な“伝統的昔語り”とされる作品を選び出して、達斡爾民族の伝統的な文学作品としての価値を与えた作業であった。

４－２．達斡爾地方の民族文化幹部による民族文化活動

以上の学者たちの研究以外には、達斡爾民族が居住する地方の政府の民族文化幹部が民族文化を宣伝する活動の傍らで、当時の達斡爾民族の間にすでに存在した文化とその担い手である民衆の発掘収集、そして民衆による民族文化の上演（表出）を組織し実施した。学者たちの研究調査活動の成果は書籍や論文などの形で現れたのに対し、政府が行った民族文化活動は具体的な踊りや歌謡、儀式の創出に貢献した。

たとえば、1957 年５月、フフホトで開催された自治区成立十周年大会において、公的機関に勤める達斡爾民族の職員と幹部たちが組織した「‘貝闊’隊」が boikoo[10] を上演した。また 1963 年８月には、自治旗成立五周年記念行事の一環として、モリダワー旗で民族芸術の展覧を行い、達斡爾民族文化である哈尼卡[11] と刺繍の作品を展覧した（鉄林嘎 1998：949）。1986 年 12 月 16 日には、北京の民族文化宮において、当時のフルンボイル盟宗教事務所、フルンボイル盟文化処、フルンボイル盟展覧館、モリダワー達斡爾族自治旗の政府は「中国達斡爾文化展覧」を開催した（鉄林嘎 1998：67）。また、モリダワー達斡爾

10　ホッケーに似た球技。

11　達斡爾語 haniaakaa。「樺の樹皮で作った人形」の意味（恩和巴図 1983：73）。

民族(minzu)自治旗政府の主催で、2001年の7月16日から8月15日までの一ヶ月間、「第一回民族文化芸術節」という活動がモリダワー達斡爾族自治旗で開催され、ウチュン（烏春）[12]の上演、達斡爾語での演説コンテスト、達斡爾民族(minzu)衣装とアクセサリーのコンテスト、民間手工芸品の展覧などの多様な民族(minzu)文化活動が開催された（卓仁、孟大偉 2008：666）。2010年6月18日には中国の少数民族(minzu)として「穿超千年－神奇達斡爾」という歌舞ショーが台湾の台北国父記念館で演じられた[13]。近年では、2010年にモリダワー達斡爾族自治旗政府が「第一届中国モリダワーホッケーの祝日」と「達斡爾民族(minzu)衣装とアクセサリーのデザインコンテスト」のような活動も行われた。

これら活動が民族(minzu)自治地域のみならず、中央や海外でも開催されたことは、「達斡爾語」、「達斡爾民族(minzu)歌謡」、「達斡爾民族(minzu)舞踊」、「達斡爾民族(minzu)衣装」、「達斡爾民族(minzu)スポーツ」、「達斡爾民族(minzu)工芸」など達斡爾民族(minzu)の文化を、達斡爾民族(minzu)の人々はもちろん、その他の人々にも認識させることとなったのである。

以上のような中央・地方の各レベルの政府によって行われた民族(minzu)文化活動以外にも、達斡爾民族(minzu)が居住する各地に博物館、公園、記念碑を建設する行為や、これら施設によって、ある歴史的出来事を記念・顕彰するコメモレイションを通じて、民族(minzu)文化の発展が促進されたと筆者は考えている。たとえば、1990年代から達斡爾民族(minzu)が居住する地方で博物館、公園、記念碑が建てられ始めた。モリダワー達斡爾族自治旗の達斡爾民族(minzu)博物館（1998年8月8日）、チチハル市の達斡爾文化展覧館（2000年6月）、エヴェンキ自治旗南屯の巴彦塔拉達斡爾民族(minzu)博物館（2004年8月）、モリダワー達斡爾族自治旗のシャマン博物館（2006年10月）、モリダワー達斡爾族自治旗の中国達斡爾民族(minzu)園（2003年8月15日）などである。

これらの施設やその建設は達斡爾民族(minzu)文化を展示し人々に達斡爾民族(minzu)文化のイメージを与えるほか、民族(minzu)の輝かしい歴史を記念・顕彰している。このような中国の少数民族(minzu)文化のイメージ形成やコメモレイションは、達斡爾民族(minzu)の起源や根源的民族(minzu)文化を規定・展示することを通じて、達斡爾民族(minzu)の歴史と文化の伝播に一定の役割を果たし、達斡爾民族(minzu)としての統合を促す装置となっているのである。

4－3．達斡爾学会の作業

以上の二つの方法以外には達斡爾学会による民族(minzu)文化創出もある。内モンゴル自治区の文化研究機関に勤務していた達斡爾民族(minzu)の学者が、民族(minzu)文化を発展させる基礎とし、達斡爾民族(minzu)の学者たちの研究工作を発展させようと、1980年4月にフフホトで「内蒙古自治

12　この言葉は元々満州語の「話す」という意味である。達斡爾民族(minzu)では会話調と歌謡調を混ぜた形で歌う民間叙事詩を指す。

13 「穿超千年－神奇達斡爾」http://www.mldw.gov.cn/content/news_view.php?id=2741#。2012年11月29日アクセス。

区達斡爾歴史言語文学学会」を設立した（孟志東、恩和巴図、呉団英 1987：７）。達斡爾歴史言語文学学会は「達斡爾学会」という略称もよく用いられる。2007 年現在、中国各地には 11 の達斡爾学会がある（満都爾図 2007:502-505）。学会は学術会議、刊行物の発行、民族（minzu）の文化や歴史を記念する碑や公園の建築を提案するなどの作業を通じて、民族（minzu）文化の創出に大きな役割を果たしている。

たとえば、内モンゴル達斡爾学会は「郭道甫[14] 誕生 100 周年学術研討会」（1994 年）、「凌昇[15] 事件六十周年学術研討会」（1996 年）を開催した（満都爾図 2007：502）。黒龍江省達斡爾学会は、「達斡爾族経済と社会発展」、「達斡爾族言語文字」、「解放戦争時期の達斡爾族」、「二十一世紀の達斡爾族の発展」のような 10 回の討論会を開催したことがある（満都爾図 2007：503）。このような活動は、達斡爾民族（minzu）とその歴史ならびに歴史的役割、達斡爾民族（minzu）の文化の内容を明確化する働きを果たしたはずであり、達斡爾民族（minzu）文化の創出に大きな意義を持ったと評価できるのである。

学術会議以外に、各地の達斡爾学会はそれぞれ雑誌や書籍を刊行している。内モンゴル達斡爾学会は『達斡爾族研究』（2000 年までに第七輯）、黒龍江省達斡爾学会は『二十一世紀達斡爾族発展研究』（黒龍江省達斡爾族学会、斉斉哈爾市達斡爾族学会 2000）、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会は『達斡爾資料集』（2011 年までに第十輯）などの逐次刊行物を出版してきた。これら逐次刊行物の主な内容は、ダフール人に関する文献史料から現代の達斡爾民族（minzu）に関する研究まで広範囲に及んでいるが、民族（minzu）識別前のダフール人も達斡爾民族（minzu）として扱っている。これによって 1956 年に識別された民族（minzu）の歴史的時間を広げ、研究や記述の対象を大いに広げ、内容を豊かにすることに成功している。いうまでもなくこれら学術的逐次刊行物は、達斡爾民族（minzu）の歴史と文化を明らかにし、それを文字の形で示し伝えていると言う点で、これも達斡爾民族（minzu）の創出に重要な役割を果たしている。

また各地の達斡爾学会は、民族（minzu）の文化や歴史を記念する碑や公園の建築を提案して、地方政府に建設を働きかけたり、自ら資金を調達して建設することを申請している。上に提示したような達斡爾民族（minzu）が居住する各地に博物館、公園、記念碑を建設する行為やこれら施設によって、ある歴史的出来事を記念・顕彰する行為であるコメモレイションに大きな役割を果たしてもいる。たとえば、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会は、自らの活動成果の中に、副理事長兼秘書長の楽志徳氏が、1992 年以来、達斡爾民族の歴史や文化を

14　1894 ～ ? 。ダフール人。本名はメルセンタイ（またはメルセ）。現在の内モンゴル自治区ハイラル市エヴェンキ族自治旗の人。内モンゴル人民革命党の中央執行委員、秘書長、瀋陽東北蒙旗師範学校の学長を担った。1931 年学長職を辞した。日本が中国東北地方を侵略した“九一八事件（満州事変）”の時には、日本の侵略に抵抗したが、後、ソ連の大使館での手続中にソ連側に拘束され、ソ連で死刑判決を受けて以降、消息不明となった。
http://zh.wikipedia.org/wiki/%E9%83%AD%E9%81%93%E7%94%AB、2014 年 1 月 7 日アクセス。

15　注 4 を参照。

記念する施設の建設をモリダワー達斡爾族自治旗共産党委員会や同旗政府に提案してきた功績を掲げている。その中には、各種の記念碑や歴史的人物の塑像の建設、雅克薩城の復元、中国達斡爾民族園に設置すべき文化施設の提案などが数え上げられている（娜日斯 2008：33）。

4－4．民衆の参加

上述した学者、政府、達斡爾学会による活動以外に、達斡爾民族(minzu)の民衆も達斡爾民族(minzu)文化の告知、宣伝に加わり、民族(minzu)文化の発展を一面で促進している。その好例が、インターネット掲示板「達斡爾族論壇」（http://www.dawoer.com/bbs/）である。この掲示板は 2005 年に北京在住の達斡爾民族(minzu)女性であり北京達斡爾族聯誼会秘書長を務める夢迪氏が開設した。夢迪氏がこのような掲示板を開設したのは、「より多くの人にわたしたちのことを理解してもらい、達斡爾のことを知ってもらうため」であるという。この掲示板に集っているのは、全国各地の達斡爾民族(minzu)人である。彼らは、達斡爾民族(minzu)のニュース、経済、概況、風俗文化、民族(minzu)芸術、民族(minzu)研究などを話題にコミュニケーションし文化交流を行っている。2013 年 5 月 24 日午後の時点では 12 項目の書き込みがあり、掲示板開設以来最多の書き込み数は 361 項目、最高参加者数は 108 人に上っている。

一方、筆者の現地調査に限って言えば、現在、達斡爾民族(minzu)の伝統的とされる文化活動に参加するのは、主に達斡爾民族(minzu)の中高年（50 代から 70 代まで）のすでに退職した民衆である。筆者がモリダワー達斡爾族自治旗での現地調査で実見した、民族(minzu)の伝統舞踊である「魯日格楽」を踊っていた 12 人のうち 11 人は退職女性であった。

また、モリダワー達斡爾族自治旗の民族(minzu)中学校の達斡爾民族(minzu)学生は、モリダワー達斡爾族自治旗政府が開催している民族(minzu)文化活動において、達斡爾民族(minzu)の若者の代表として達斡爾民族(minzu)の舞踊の上演に参加している。例えば、筆者が調査した「中国モリダワーホッケーの祝日」（2010 年 8 月 6 日）では、達斡爾中学の学生たちが、達斡爾民族(minzu)の伝統的スポーツと言われているホッケー競技に題材を得て創作された「ホッケー踊り」を踊ったのを目撃した。また、毎年行われる斡包節[16]（2011 年 6 月 28 日）で民族(minzu)舞踊「魯日格楽」をアレンジした「魯日格楽踊り」を踊ったのも目撃した。彼らは、こうした民族(minzu)的創作舞踊をすべて学校で習うのであり、筆者はその様子も目撃した[17]。この学校では、達斡爾民族(minzu)学生は、この様な民族(minzu)文化活動に参加することによって、自分たち民族(minzu)やその文化に関する認識を

16　斡包は達斡爾語 oboo の漢字音写（恩和巴図 1983：165）。oboo とは天地、神霊を祭るための石塚。斡包節とは、元来の斡包の祭祀（oboo での天地・神霊の祭祀）のかたわらで付随して行われる各種娯楽活動を合わせた総称でモリダワー達斡爾族自治旗で毎年の 6 月 28 日に行っている。詳しくは 4-5-3）を参照。

17　丁石慶によると、この学校では、達斡爾語でのスピーチコンテスト、達斡爾民族(minzu)の歌曲コンテストなどの活動を通じて、民族(minzu)文化を向上させ、発掘していると述べている（丁石慶 2009：155）。

深めている。

4－5．民族文化の要素の創出

以上のいくつかの方法を通じて、達斡爾民族文化の要素が次々に創出されて現在に至っている。

4－5－1．民族の歴史

民族と識別された後の達斡爾民族にとって、自らの起源出自を含む「達斡爾民族の歴史」を明らかにすることは、中国政府によって認められた単一の民族としてふさわしい歴史を持っていることを証する極めて重要な事柄であった。

「民族の歴史」を明示する役割を担った『達斡爾族簡史』は「単一の民族」としての歴史的根拠の根底をどのように説明しているかという点で注目に値する。ここでは、達斡爾民族の起源を契丹に求める契丹後裔説は達斡爾民族に合う史実的説得力がある、という結論が提示された（達斡爾族簡史編纂組 1986：10）。この契丹後裔説によって、「達斡爾民族の歴史」は元や明の時代にまで遡らせることができるようになり、「元明両代の達斡爾民族」、「清代の達斡爾民族」、「中華民国の達斡爾民族」、「偽満洲国時期の達斡爾民族」、「解放戦争時期の達斡爾民族」のような「各時代の達斡爾民族の歴史」が研究・叙述できるようになった（達斡爾族簡史編纂組 1986：1–2）。このような、長い歴史的時間にわたる通時的研究が可能となったことは、達斡爾民族の歴史を創出するための重要な土台になった。

4－5－2．民族文字

単一民族と識別された後、民族の言語を表記するための文字を有することは民族の重要な「標識」あるいは「民族の特徴」になるとして、1955 年、中国科学院は少数民族言語調査隊を組織して、ダフール地方で調査を行った。この調査に基づいて、1956 年 6 月、達斡爾民族の主として言語学者たちが、達斡爾語の言語の所属を明確にし、これを基礎に『達斡爾文字方案』（草案）を作成した。1956 年 12 月にフフホト市で開催された達斡爾語文工作会議では、スラブ文字に基づいて、バトハン（布特哈）方言を土台にして、ノウン（納文）方言を標準語とした達斡爾文字方案を通過させた（孟志東、恩和巴図、呉団英 1987：5–6）。このような過程を経て、達斡爾民族の標準語と文字が確定された。民族文化の象徴ともいえる民族の言語を表現するための文字を創出するために、主として達斡爾民族の学者を主とする言語学者たちが努力を尽くしたのであった[18]。

18　しかし、この民族文字は結局は実用されなかった。

4－5－3．民族(minzu)としての祭り

筆者が調査したモリダワー達斡爾族自治旗とチチハル市では、それぞれの達斡爾学会が主催する「斡包節」・「敖宝会」（斡包祭り・敖宝祭り）[19]が開催されている。モリダワー達斡爾族自治旗では「斡包節」を2001年から毎年6月28日に開催している。チチハル市では「敖宝会」を二年に一度8月18日に開催している（何文均、敖海林2007：202）。また、チチハル市ムルス達斡爾族区、モリダワー達斡爾族自治旗、エヴェンキ族自治旗南屯では、達斡爾民族(minzu)の伝統的な食用植物とされるクムビル[20]（場所によってはクムル kumul と発音する）を摘みとる祭が行われている。このような「民族(minzu)としての祭り」の創出は、各地の達斡爾学会が実施し、達斡爾民族(minzu)の民間信仰的習俗や食文化を民族(minzu)の祝祭として構築したことを示すものである。

また、1950年代の調査の結果によって編纂された『達斡爾族社会歴史調査』（1985年）では、1958年に学者たちが、すでに達斡爾民族(minzu)となった人々が居住する各地での調査をまとめて、達斡爾民族(minzu)のものとしての物質生活（飲食、居住、服飾、交通）、社会組織（哈拉[21]、莫昆[22]）、生活習慣（婚姻、葬式、祝日、礼儀、タブー）、宗教信仰（祭神、雅徳根[23]）、文学芸術（神話、民間伝承、詩歌、音楽、踊り、ゲーム）、民間スポーツ（曲棍球、アーチェリー、競馬、レスリング、扳棍[24]、頸力[25]、猟碁[26]、囲碁）を明示した（内蒙古自治区編輯組1985：178-291）。いうまでもなく、これらは民族(minzu)識別後に突如としてできあがったわけではなく、識別以前からダフール人の中にあったものである。過去からあったこれらのものを「達斡爾民族(minzu)」のものと位置づけたことで、「達斡爾民族(minzu)の伝統的な」ものとなったのである。

5．達斡爾民族(minzu)文化の伝統化

上の民族(minzu)文化の要素の創出に続いて、近年、達斡爾民族(minzu)は、1950年代以降現在まで創出した民族(minzu)の文化的要素を伝統として位置づけて、「伝統文化」を次々と創出してい

---

19 「敖宝会」の「敖宝」は「斡包節」の「斡包」と同じ意味。注16参照。

20 ヨモギの一種類。

21 達斡爾語 hal。「姓」の意味（恩和巴図1983：72）。

22 達斡爾語 mokon。「族」「氏族」の意味（恩和巴図1983：150）。hal の下位にある社会組織名。

23 達斡爾語 yadgan。「シャーマン」の意味（恩和巴図1983：239）。

24 達斡爾語 mood tatbei。対面して座った二人が一本の木を握って引き合う競技（満都爾図2007：470）。

25 達斡爾語 huju meljibei。対面して座った二人の首に輪状にした帯をかけ引き合う競技（満都爾図2007：470）。

26 達斡爾語 bowo talibei。達斡爾将棋のこと（満都爾図2007：471-472）。

る。ホブズボウムに従えば、「伝統の創造」には３つの要点がある（ホブズボウム 1992：9-11）。第一に、歴史性と現代創作性（“捏造”も含む）である。「伝統」とは長い年月を経たものと思われ、そう言われているものであるが、その実往々にしてごく最近成立したり、また時には捏造されたりしたものもある。第二に、過去遡及性と反復性である。「伝統」とは新しい状況に直面した際古い状況に言及する形をとるか、あるいは半ば義務的な反復によって過去を築き上げるかといった対応のことである。第三に、‘永久不変’化である。伝統の近代世界の恒常的な変化および革新と、社会生活のすくなくともある部分を永久不変のものとして構造化しようとする試みとの対照性である。以下では、これらの３つの要点に着目して達斡爾民族（minzu）文化の伝統化について考察する。

５－１．伝統化の基礎－民族（minzu）の歴史の構築

上の４－１で述べたように、1950 年代、中央政府は、民族（minzu）識別活動に引き続いて、民族（minzu）と識別された人々の歴史に関する調査を実施した。達斡爾民族（minzu）の歴史に関する研究は 50 年代から始まったが、1995 年に行われた達斡爾民族（minzu）の DNA の分析によって、達斡爾民族（minzu）は契丹の後裔であるとの説が広がっている。1995 年、中国社会科学院と中国医学科学院は「分子考古学」という研究プロジェクトを実施した。これは、DNA 解析の技術によって、達斡爾民族（minzu）は契丹の後裔であるか否かという問題を研究することを目的としたものであった。この結果、達斡爾民族（minzu）は契丹の後裔であるとの結論が出されたのであった（巴図宝音、孟志東、杜興華 2011：1-2）。

達斡爾民族（minzu）の族源確定問題、つまり達斡爾民族（minzu）の出自を確定することは、達斡爾民族（minzu）の歴史の中でもっとも重要ではあるが、今もなお明確な結論が出ていない問題である。しかし、この DNA の解析結果によって、達斡爾民族（minzu）が契丹の後裔であるとする説に新しい根拠が加わった。このことから一部の達斡爾民族（minzu）の学者や達斡爾民族（minzu）地方の幹部、及び一部民衆の中、とくに若者たちの中に「契丹の後裔」であるとの認識が形成されている。こうして、達斡爾民族（minzu）は「民族（minzu）の歴史」を獲得し、以下に述べるような各種要素の伝統化の基盤を得たのである。

５－２．民族（minzu）の文学

達斡爾民族（minzu）の文学の代表格はウチュン（烏春）である。ウチュンをまとめた『達斡爾族伝統詩歌選訳』によれば、達斡爾民族（minzu）の民間に珍蔵されてきたウチュンとは、かつてのダフール人が清代の康熙年間から学んでいた満洲語を記録する満洲文字を用いて記録されたものであるというが、これに採られたもっとも古い作品は清代乾隆年間のものである。また、同書の編者らは民間で老人や民間芸人が口述する作品を収集し収録している（奥登挂、呼思楽 1991：３）。その一方、現在も歌い続けられるウチュンの中には自作自演になるものもある（卓仁・孟大偉 2008：669）。よってウチュンは「歴史性のある伝統」であるこ

とは間違いないが、現在もなお創作上演され続けているものもある点で現代創作性も有している。しかし、これが民族(minzu)の伝統として“捏造”されていると言うことはできないだろう。ウチュンは1999年以降、モリダワー達斡爾族自治旗文化館によって幾度にもわたって繰り返し演唱会が開催されており（卓仁・孟大偉2008：669)、この点で反復性がある。ウチュンがもつ歴史性と現代創造性、そして反復性によって、この達斡爾民族(minzu)の文学とそこに描かれている彼らの社会生活は永久不変化がなされていると見ることができる。

5－3．民族(minzu)の祭典

現在、達斡爾民族(minzu)の一番大きな祭りは「斡包節」（斡包祭り）である。「斡包節」の「斡包」とはモンゴル語では「オボ」（漢字では敖包）という。元々、オボを祭る行為は、雨乞いするために行う儀式であり、北方民族の中には普遍的に存在した祭りである。

今の達斡爾民族(minzu)の「斡包節」は、2004年のモリダワー達斡爾族自治旗第十回人民代表大会第一回会議で開催が認められた祭りであり、毎年6月28日にモリダワー達斡爾族自治旗の「中国達斡爾民族(minzu)園」で行われることになっている。この祭りは政府が主催しているので、純粋な意味での民間活動ではない。筆者が調査した2011年の「斡包節」は、各達斡爾民族(minzu)地方の達斡爾民族(minzu)人を集める祭りになっており、神仏や祖先を祭り、民俗活動（魚を捕まえる活動、水神を祭る活動)、民族(minzu)スポーツ競技（達斡爾相撲、アーチェリー、頸力、扳輥、押加[27])、民間の民族(minzu)歌舞の公演などの他、鹿将棋･サク[28]･ハニカ[29]のコンテスト、民族(minzu)料理コンテスト、伝統漁法コンテスト、民族(minzu)衣装ファッションショーや観光（シャーマニズム博物館、布特哈総管衙門、ホッケー訓練所）などのような新しい内容を含んだ祭りとなっている（岳暁嶺2011：１；「2011年莫力達瓦達斡爾族自治旗斡包節活動日程」)。

達斡爾民族(minzu)の「斡包節」は伝統的な祭りというよりは達斡爾民族(minzu)の会合となっているのであって、達斡爾民族(minzu)にとっては新しく作られた伝統的な斡包節の意味を拡大させた民族(minzu)の行事となっているのである。

5－4．民族(minzu)の体育活動

達斡爾民族(minzu)の体育活動については、boikooとホッケーを例に考察する。達斡爾民族(minzu)の起源とされる契丹人が建てた遼代から契丹人たちには棒で球を転がして打つ遊戯慣習があったことを史料によって明らかにし、さらに、これが、現在も達斡爾民族(minzu)が楽しんでいるboikoo、そしてオリンピック競技にもなっているホッケーと基本的に同じ競技方法

27　反対を向き四つん這いなった二人の首に、輪状にした一本の布を掛け合って引き合う競技。

28　サクsakとは、ノロジカのくるぶしの骨で作った遊具。

29　ハニカhaniakaaとは、樺の樹皮で作った人形のこと。

であると主張するにとどまらず、boikoo は“古いホッケー”であるとまで述べる[30]。このことから、boikoo には遼代球技に遡るという歴史性がある。そして、boikoo は毎年の達斡爾民族（minzu）の斡包節でも実演競技されているので、半ば義務的に反復しているものである。boikoo は歴史的には契丹伝来の球技とされ、現代的には世界で広く行われているいわゆるホッケーと関連づけられている。この点で boikoo は永久不変の構造を有するものとなっているばかりでなく、これを通じて、達斡爾民族（minzu）が契丹の後裔であるということもが永久不変の構造を有するようになっているのである。

5－5．民族（minzu）の踊り

もう一つの伝統化された習慣の事例としては、現在、達斡爾の民族（minzu）舞踊として魯日格勒[31]、哈庫麦、阿罕伯と呼ばれる伝統的舞踊がある。この踊りは建国初期には、春節の時に“笊籬姑姑”という踊りの神を招くために踊る民衆の踊りであった（欒延琴 2009：255–256）。1950 年代、民族（minzu）文化工作を実施した幹部が民間で収集した踊りがこれである。1980 年代に入ってフフホトとモリダワー達斡爾族自治旗の政府によって開催された公演などの民族（minzu）文化活動を通じて達斡爾民族（minzu）の舞踊として形成された。筆者の調査によれば、この踊りのそれぞれの呼称がいつ形成されたかは確認できないが、伝統的な民間の踊りが伝統的な民族（minzu）の舞踊として名付けられて、達斡爾民族（minzu）の舞踊とされたことを証している。

5－6．民族（minzu）の食品

一部の日常生活も伝統化された。どこでも見られる普通の生活であるが、達斡爾民族（minzu）の伝統として再定義された。

クムビル食は、現在の達斡爾民族（minzu）にとってはごく通常の食生活になっているばかりではなく、民族（minzu）伝統食品と見なされている。例えば、以下の例を見よう。

> 柳蒿芽[32]は、達斡爾語で“昆米勒”といい、原産地は大興安嶺の東南の麓、嫩江の両岸であり、何世代にもわたって達斡爾民族（minzu）が愛してきた天然の優れたエコ産品である。この産品は伝統工芸と現代技術を組み合わせて加工したものである。（後略）（下線筆者）（「山野菜産品紹介」：197）

ここに見えているように、クムビルは商品化されるにあたり、「何世代にもわたって達斡爾民族（minzu）が愛してきた」ものとされ、その加工にあたっては「伝統工芸」の技法を用いていると宣伝されている。

30　会員ナサンダライ氏提供「曲棍球是達斡爾民族古老伝統運動項目」。

31　満都爾図 2007 によると、魯日格勒はモリダワー達斡爾族自治旗では lurgiel と、チチハル地方では hakumiel（哈庫麦勒）とハイラル地方では ahenbiel（阿罕伯勒）と呼ぶと説明されている（満都爾図 2007：457）

32　クムビルのこと。

このクムビルの例から、現在言われる達斡爾民族(minzu)の伝統の中には、一部の日常生活が民族(minzu)の伝統として位置づけされたものがあることは明らかである。

5－7．民族(minzu)衣装

筆者が観察するところでは、現在、達斡爾民族(minzu)の女性の民族(minzu)衣装とされているものは、満民族(minzu)の女性の服と似ており、男性の民族(minzu)衣装はモンゴル民族(minzu)の男性の服と似ている。

敖拉・楽日徳氏によると、「服装について言えば、満族の服装の特徴はすでに漢族、達斡爾及び各族全てが受容し、“旗袍”と通称されている。そして旗袍の原型と流行した“旗袍”は時代を経るに従って発展し、皆が好む服装を形作った。」（敖拉・楽日徳 2009：16）という。これが正しいとするならば、かつてのダフール人は満民族(minzu)の旗袍を着用していたということになる。

しかし、モリダワー達斡爾族自治旗達斡爾学会の楽志徳氏は、2010 年 7 月 1 日に、全国達斡爾学会の年次総会で「関于達斡爾左衽服装及資料」という資料を配付した。その中で、「春秋戦国から今に至るまでの北方民族の中で唯一達斡爾人だけが左襟の服装を伝承し保存している」として、中国の史書『魏書』や現在の内モンゴル自治区バーリン左旗にある遼上京遺跡から出土した契丹人の左襟の服の写真、遼代墓壁画に描かれた女性の服、17 世紀にダフール人の現住地であるダウリヤ地方を通過したロシア帝国の使節が書いた旅行記に載せられた絵画など、数点の証拠を示して、「達斡爾の服装文化は古来の民族服の特色を伝承し発揚すべきである。独特の左襟服を提唱する。ご高察頂きたい。」と結んでいる[33]。筆者は 2011 年 6 月 27 日にモリダワー達斡爾族自治旗で開催された第二届達斡爾民族(minzu)服飾デザインコンテストに参加し、左襟の服を目撃している。さらに、2013 年に

写真 1　“右襟”と“左襟”がはっきり見える達斡爾民族(minzu)の服装

（2011 年 6 月 26 日、筆者撮影）。

33　楽志徳氏提供「関于達斡爾左衽服装及資料」2010 年 7 月 1 日。

はモリダワー達斡爾族自治旗人民政府の決定により「“左襟達斡爾”及び第三届中国達斡爾族民族服飾デザインコンテスト」の開催が予定されている[34]。このコンテストの目的は、「達斡爾民族を大いに発揚し、達斡爾民族の服飾を発掘・保護・伝承し、文化大旗を建設するプロセスを加速するため」であるという。これによって、モンゴル民族や満民族の服に似たそれまでの民族衣装との差別化が成し遂げられた。

6．終わりに

本論文では達斡爾民族と識別された後の達斡爾民族の形成について考察を行った。達斡爾民族は国家の政策によって創られた民族である。達斡爾民族と識別される前のダフール人は、1956 年に国家によって単一の民族として認定された後に、民族名称を指定され、民族自治地域を与えられ、国家によって民族幹部が養成された。

しかし、達斡爾民族の形成は政治の作業だけではなく、自らの民族の歴史・文字・文学・祭りなどの文化的要素を創出してこれを伝統化することで民族としての文化的内実を充実させた。このような創出した文化によって民族として創造されたと見ることができる。つまり、文化的にも民族として創造された側面があると言える。さらに、達斡爾民族自身は民族文化を創出しその伝統化を行った。このような過程を経て民族としての創造が進行した。

この民族の創造の過程では政府により行われた民族識別のような作業があるだけではなく、民族として識別されたさらにその後には、達斡爾民族側の人々も役割を果たした。達斡爾民族の創造過程においては、達斡爾の民族幹部から民衆までもが、具体的な文化の創造の担い手もしくは参加者として関わるという形式をとることで達斡爾民族を実質的に内面化したといえる。つまり、達斡爾民族の形成は政府だけによるものではない。達斡爾民族側の人々、主に政治幹部と知識人たちが大きな役割を担ったことは確かである。

参考文献

【日本語文献】

綾部恒雄『講座世界の先住民族　ファースト・ピープルズの現在 10　失われる文化・失われるアイデンティティ』明石書店、2007。

伊藤正子『民族という政治－ベトナム民族分類の歴史と現在』三元社、2008。

エリック・ホブズボウム、テレンス・レンジャー編、『作られた伝統』（前川啓治、梶原景昭他訳）紀伊国屋書店、1992。

暁敏「近代におけるダフール人の政治活動－そのアイデンティティに関する一考察－」、『中国研究月

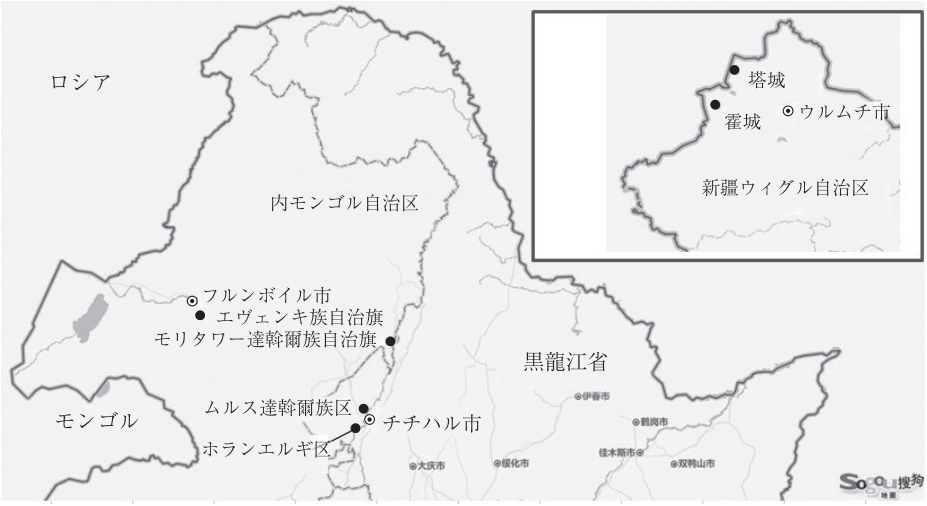
34 「“左襟達斡爾”及び第三届中国達斡爾族民族服飾デザインコンテスト」、http://www.nmrb.com.cn/2013/0516/167543.shtml、2013 年 5 月 27 日アクセス。

報』62-2（2008）：3-19。
シロコゴロフ『北方ツングースの社會構成』（川久保悌郎　田中克己訳）岩波書店、1982。
シンジルト『民族の語りの文法：中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』風響社、2003。
白鳥庫吉『白鳥庫吉全集』（第四巻）岩波書店　1970。
毛里和子『周縁からの中国：民族問題と国家』東京大学出版社、1998。
ユ・ヒョヂョン、ボルジギン・ブレンサイン『境界に生きるモンゴル世界－二十世紀における民族と国家－』八月書館、2008。
劉正愛『民族生成の歴史人類学－満洲・旗人・満族』風響社、2006。

【中国語文献】

「2011 年莫力達瓦達斡爾族自治旗斡包節活動日程」（筆者蔵）。
奥登掛、呼恩楽『達斡爾族伝統詩歌選訳』内蒙古人民出版社、1991。
敖拉・楽日德「達斡爾歴史文化遺産搶救拾零三事」（楽志德、娜日斯 2009：16-17）。
巴図宝音、鄂景海『中国達斡爾族史話』　民族出版社　2005。
巴図宝音、孟志東、杜興華『達斡爾族源於契丹論』中国社会科学、2011。
達斡爾族簡史編纂組『達斡爾族簡史』内蒙古人民出版社、1986。
『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室『達斡爾資料集』（第一集）民族出版社、1996。
『達斡爾資料集』編集委員会、全国少数民族古籍整理研究室『達斡爾資料集』（第二集）民族出版社、1998。
丁石慶『莫旗達斡爾族語言使用現状与発展趨勢』商務印書館、2009。
恩和巴図『達漢小詞典』内蒙古人民出版社、1983。
恩和巴図『達斡爾語和蒙古語』内蒙古人民出版社、1988。
恩和巴図『達斡爾語話語材料』内蒙古人民出版社　1985。
何文均、敖海林『呉維栄文集』斉斉哈爾市達斡爾族学会、黒龍江省達斡爾族研究会、2007。
黄光学、施聯朱『中国的民族識別－ 56 個民族的来歴』民族出版社、2005。
李資源『中国共産党民族工作史』広西人民出版社、2000。
楽志德、娜日斯『達斡爾論壇』（中）、内蒙古文化出版社、2008。
楽志德、娜日斯『達斡爾論壇』（下）、内蒙古文化出版社、2009。
欒延琴「達斡爾族民間舞踏“魯日格勒”」（楽志德、娜日斯『達斡爾論壇』（下）内蒙古文化出版社、2009：255-276）。
満都爾図『達斡爾族百科詞典』内蒙古文化出版社、2007。
孟志東『中国達斡爾族古籍彙籍』内蒙古文化出版社、2007。
孟志東『中国達斡爾族民間故事選集』内蒙古文化出版社、2007。
孟志東『中国達爾語韻文体文学作品選集』（上、下）内蒙古文化出版社、2007。
孟志東、恩和巴図、呉団英『達斡爾族研究』（第一集）内蒙古達斡爾歴史言語文学学会、1987。
娜日斯「文化復興，彰顕民族(minzu)品格－対莫力達瓦達斡爾学会成果思索」（楽志德、娜日斯 2008：30-33）。
内蒙古自治区編集組『達斡爾族社会歴史調査』内蒙古人民出版社、1985。
人民出版社編『民族政策文献彙編』人民出版社、1953。
「山野菜産品紹介」（楽志德、娜日斯『達斡爾論壇』（下）内蒙古文化出版社、2009：197）。

少数民族語言調査第五工作隊達呼爾語調査組『関於達呼爾族的文字問題』、1956。
蘇勇『呼倫貝爾盟民族志』内蒙古人民出版社、1997。
賽音塔娜、托婭『達斡爾文学史』内蒙古大学出版社、1997。
鉄林嘎『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』内蒙古人民出版社、1998。
岳暁嶺『関于斡包節達斡爾族伝統文化重構』内蒙古大学碩士論文、2011 年 5 月 23 日。
中央民族学院研究部編『中国民族問題研究集刊』（第一輯）、1955。
卓仁、孟大偉『莫力達瓦達斡爾族自治旗志』内蒙古文化出版社、2008。



付録　達斡爾民族（minzu）の主な居住地域

『達斡爾族百科詞典』（2007）より作成。

（BAI Sarina）